

第一・第二ラテラノ公会議（1123、1139 年）決議文翻訳

監修：藤崎 衛

訳：纒田 宗紀、上遠野 翔、紺谷 由紀、佐野 大起

柴田 隆功、田野崎 アンドレーア嵐、藤崎 衛

増永 菜生、望月 滯、築田 航

1. 第1・第2ラテラノ公会議について

第1ラテラノ公会議（1123年）および第2ラテラノ公会議（1139年）は、カトリック教会にとって第9回目と第10回目の普遍公会議とされ、それから1世紀間足らずの間に第3ラテラノ公会議（1179年）と第4ラテラノ公会議（1215年）が続くこととなる。さらにその後二度にわたって開催されたリヨンでの公会議と併せ、12世紀から13世紀にかけては、教会史のみならず西洋中世の社会全般にとって重要な公会議が開かれたのである。本稿は、これら中世における一連の公会議の嚆矢をなす第1ラテラノ公会議と、それに続く第2ラテラノ公会議の決議文の翻訳である¹。

「公会議」や「普遍公会議」とは後に形作られた分類ではあるが、この分類は会議の規模や形態において一定の妥当性を有している。それをふまえると、第1ラテラノ公会議は、西欧世界において初めて開催された公会議であるという点において（それまではニカイアやコンスタンティノーブルなど東方において開催された）、また250年以上を経てようやく開かれた公会議であるという点において（第4コンスタンティノーブル公会議の開催は869～870年）、中世ラテン・キリスト教の歴史における画期的な出来事であったと評価してよい。これは、言い換えるなら、ラテン西洋世界を広く覆うカトリック圏がまとまりを見せ、そのなかで教皇が存在感を高めつつ主導権を握るという状況が訪れたということである。ローマのラテラノ（サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ聖堂）がローマ司教の司教座にほかならないことを想起しよう。さて、今回決議文の翻訳を試みる二度のラテラノ公会議に関し、各々にどのような時代背景があったのか、またどのような問題が議論され決議が下されたのか、ごく簡潔に見渡しておきたい。なお、詳細かつ全般的には、R. フォルヴィルの研究²や本翻訳の底本（凡例を参照）の校訂者

¹ 13世紀に開かれた三回の公会議の決議文翻訳は次の通り。藤崎衛（監修）「第四ラテラノ公会議（1215年）決議文翻訳」『クリオ』第29号（2015年）、87-130頁；同「第一リヨン公会議（1245年）決議文翻訳」『クリオ』第30号（2016年）、100-127頁；同「第二リヨン公会議（1274年）決議文翻訳」『クリオ』第31号（2017年）、123-148頁。

² これら四つの公会議については次の文献が基本的な研究である。Raymonde Foreville, *Latran I, II*,

の解説、さらに日本語の文献としては関口武彦氏による論攷が参考になる³。関連する文献については、これらの記事のなかで確認すればよい。

まず、1123 年 3 月に開かれた第 1 ラテラノ公会議を考えるうえで、その前年に教皇カリクストゥス 2 世と皇帝ハインリヒ 5 世の間で締結されたヴォルムス協約を見逃してはならない⁴。事前に重ねられた交渉を踏まえ、皇帝はこの協約において指輪と杖による高位聖職者の叙任権を放棄し、高位聖職者が教会法に則って選挙によって選ばれること、そして皇帝はその被選者にレガリアを授与すること（ただしその被選者は皇帝に臣従礼を果たす）を認めた。こうして叙任権をめぐる教皇と皇帝の対立が一応の解決を見ることがとなった。カリクストゥスはこの協約の直前に各地の高位聖職者たちに公会議の招集状を送っていた。つまり、教皇は協約の実現をあらかじめ確信し、むしろその後の教会の引き締めを見据えていたのである。

第 1 ラテラノ公会議ではヴォルムス協約が承認された。会議の決議は、最初と最後の条文でシモニアが禁じられていることや、第 1、第 3、第 4、第 8、第 12、第 18、第 22 の各条が聖職叙任権に関係するなど、先行する数十年に課題となっていた教会改革の影響が色濃いことがはっきりとしている。特筆すべき特徴の一つとしては、司教権の強化も指摘することができる。すなわち第 4、第 16、第 17、第 18 の各条は、教会の霊的司牧と財産上の管理、十分の一税の受け取りなどに関して、修道士やヒエラルキアにおける司祭以下の聖職者に対して司教が明白に統制権を有していることが強調される。この点も改革期の教皇権の目指すところであったということが見えてくる。

第 2 ラテラノ公会議は、1139 年、教皇インノケンティウス 2 世によって「アナクレトゥスのシスマ」の終熄後に開催された。このシスマは、1130 年の教皇ホノリウス 2 世没後にインノケンティウス 2 世とアナクレトゥス 2 世が相対立する枢機卿の集団によって立て続けに選出されることで開始したものであり、その要因の一つには両党派の教会改革を推進するか否かの姿勢の違いがあったとも考えられている⁵。つまりこの時期も教皇庁にとって教会改革は重要事項であり続けていたのである。1138 年のアナクレトゥスの死とその後継者の退位によって 8 年 3 ヶ月の長きに及ぶ教皇庁の混乱は収まった

III et Latran IV, Paris 1965 (Histoire des conciles oecuméniques, 6).

³ 関口武彦「第一、第二ラテラノ公会議」『山形大学紀要（社会科学）』第 35 巻第 2 号（2005 年）1～21 頁；同「教皇改革（三）」『山形大学紀要（社会科学）』第 43 巻第 1 号（2012 年）1～34 頁。後者は加筆修正のうえ、同『教皇改革の研究』（南窓社、2013 年）に第四章「教皇改革（下）」として所収。

⁴ 協約のテキストをなす皇帝側文書および教皇側文書は次に収められている。*Monumenta Germaniae historica, Const. I*, Hannover 1893, nos 107-108 (pp. 159-161). 日本語訳として、鹿子木幹雄「ヴォルムス協約」『西洋法制史料選 II 中世』（創文社、1978 年）、90-98 頁。

⁵ アナクレトゥスのシスマについては、関口武彦「1130 年のシスマと枢機卿団」佐藤伊久男・松本宣郎編『歴史における宗教と国家』（南窓社、1990 年）243～290 頁。

が、その翌年 4 月に開かれたのが第 2 ラテラノ公会議である。

この公会議では、第 1 ラテラノ公会議の決議や、インノケンティウスがシスマの間に開催したクレルモン（1130 年）、ランス（1131 年）、ピサ（1135 年）などの教会会議の決議を確認することにより、シスマで疲弊した教会の建て直しが目指された。その建て直しとはすなわち、教皇たちが追求し続けていた教会の改革そのものであった。そして司教の権限を強調する傾向は、第 2 ラテラノが第 1 ラテラノの方向性を継承していることの証左である。宗教的な枠を超えた、いわば社会的な事柄に関する規定も目に付く。例えば、非戦闘員や動物の保護（第 11 条）、「神の休戦」（第 12 条）、高利貸しの禁止（第 13 条）、馬上槍試合の禁止（第 14 条）、アジール権の保証（第 15 条）、近親婚の禁止（第 17 条）、弩などの特定の武器の使用禁止（第 29 条）などがそうである。ここから我々は、12 世紀の教会が教会外の社会にも広く関心を寄せ、そこに介入しようとする姿勢を読み取ることができる。

今回訳出した二つの公会議のテキストは、11 世紀後半から 12 世紀前半にかけての教会改革運動、そのなかで教皇庁が果たした役割、改革によって浮上してきた聖職者の地位や財産（シモニア、独身制、十分の一税、聖職禄）、そして教会と世俗権力との関係を解明するうえできわめて有用であり、同時に、教会内の改革だけでなく、「神の平和」や十字軍など広く社会に関わる側面も明らかにしてくれる。招集状（例えば第 1 ラテラノ公会議に先立つドル大司教宛書簡）や著述家たちの報告（例えばライヒャスベルクのゲルホーのもの）など関連する周辺の資料を併せて参照するならば、公会議が目指した理念と公会議を取り巻く現実の相互の関連がおのずと浮かび上がってくるだろうし、同時に理念と現実の矛盾までもが露わとなるだろう。

2. 凡例

1. 底本は、「コルプス・クリスティアノールム」叢書の公会議テキスト集成に収められた次の校訂版とした。G. Gresser, “Concilium Lateranense I 1123”, in *The General Councils of Latin Christendom. From Constantinople IV to Pavia-Siena (869-1424)*, ed. A. García y García et al. (Conciliorum oecumenicorum generaliumque decreta, 2/1), Turnhout 2013, pp. 89-94 および T. Izbicki, “Concilium Lateranense II 1139”, *ibid.*, pp. 95-113.
2. G. アルベリゴ監修による第 3 版 1973 年（初版 1962 年）の普遍公会議決議集の校訂版 *Conciliorum Oecumenicorum Decreta*, ed. G. Alberigo et al., 3rd ed., Bologna 1973 および次の英仏独各国語訳も適宜参照した。 *Decrees of the Ecumenical Councils*, ed. N. P. Tanner, London/Washington, DC 1990; *Les Conciles œcuméniques : Les Décrets*, vol. 2/1, *De Nicée I à Latran V*, ed. A. Duval et al., Paris 1994; *Dekrete der ökumenischen*

Konzilien, ed. G. Alberigo et al., vol. 2, *Konzilien des Mittelalters. Vom ersten Laterankonzil (1123) bis zum fünften Laterankonzil (1512-1517)*, ed. G. Sunnus/J. Uphus von Josef Wohlmuth, 3rd ed., Paderborn 2000.

3. 条文に付与した番号は、底本に従った。
4. 各条文の表題は底本にないが、読者の便宜を図り、本翻訳ではアルベリゴ版のドイツ語訳に付された表題を参照しつつ独自に付した。
5. 『教会法大全』(*Corpus iuris canonici*) に採録されたり、公会議等に関連したりする場合は、底本の註記を参照しつつ、脚註に典拠を記した。『教会法大全』における引用のための略号は慣例に従った。フリードベルク版『教会法大全』（本稿では *Fr* と略記）やマンシ編『教会会議集成』（同じく *Mansi* と略記）などの書誌情報は底本等を参照のこと。
6. 聖書に典拠がある箇所では、底本やアルベリゴ版の註記を参照し、または独自に確認したうえで条文中の（ ）内に記した。書名や章節番号は日本聖書協会発行の『新共同訳聖書』に基づくが、書名は適宜省略した。
7. 文意を明確にするために訳文を補う必要があるときは、〔 〕を用いた。
8. 文意を明確にするために訳語の言い換えが必要なときは、〔＝ 〕を用いた。
9. 翻訳の担当者は各条文末に（ ）内に記した。

（以上、藤崎衛）

3. 第一ラテラノ公会議決議文翻訳

1⁶ シモニアに対して：叙階と昇階の禁止

聖なる父たちの模範に従い、自らの職の義務として〔それらを〕更新する我々は、誰であれ神の教会において金銭を通じて叙階され、または昇階させられることを、使徒座の権威によりあらゆる方法で禁止する。もし実際に、教会においてそのように叙階と昇階を獲得した者があれば、獲得した上位聖職禄を完全に剥奪されるべきである。

（増永菜生）

2⁷ 破門解除の禁止

我々は、自身の司教によって破門された者たちが、別の司教や大修道院長、聖職者によって交わりへと迎え入れられることを疑いなく禁じる。

（上遠野翔）

3⁸ 司教の選出と聖別

何人も教会法に則って選出された者以外を司教に聖別してはならない。しかし、もしあえてなされたならば、聖別された者も聖別した者も復位の望みなしに廃されるべきである。

（柴田隆功）

4⁹ 司教の権限について

大助祭や大司祭、または首席司祭あるいは聖堂参事会長は、教会における魂の配慮あるいは聖職禄を、司教の判断あるいは同意なしには決して何者かに授与すべきではない。いかにも聖なる規範に定められている通り、魂の配慮と教会財産の差配は、司教の判断と権力にとどまるべきなのである。しかし、もしある者がこれに反して司教に帰属する権力を我がものとしようとすれば、教会の戸口から遠ざけられるべきである。

（纓田宗紀）

5 ブルディヌスによる、無効となる叙階

我々は、ローマ教会により断罪されて以降の異端の指導者ブルディヌス¹⁰による叙階も、またその後彼によって叙階された偽司教によってなされたいかなる叙階も、無効で

⁶ 参照、トゥールーズ教会会議（1119 年）決議第 1 条 (*Mansi* 21, 226) ; C.1 q.1 c.10 (*Fr.* 1, 360).

⁷ 参照、メルフィ教会会議（1089 年）決議第 15 条 (*Mansi* 20, 724).

⁸ D. 62 c.3 (*Fr.* 1, 234)

⁹ 参照、C.16 q.7 c.11 (*Fr.* 1, 804).

¹⁰ マウリティウス・ブルディヌス、すなわちグレゴリウス 8 世の対立教皇（在位 1118-1121 年）。

あると判断する。

（上遠野翔）

6¹¹ 職位について

司祭以外の何人も首席司祭、大司祭、聖堂参事会長に、助祭以外の何人も大助祭に任命されてはならない。

（柴田隆功）

7 同棲および近親者以外の女性との共同生活の禁止

司祭、助祭または副助祭に対し、内妻や正妻との同棲および他の女性との共同生活を、我々は徹底的に禁じる。ただし、〔第一〕ニケーア公会議が親族関係という理由でのみ〔共同で〕居住することを許可した女性¹²、すなわち、母、姉妹、父方の伯叔母または母方の伯叔母、あるいはその人物において何らの疑念も正当には生まれ得ないような、その種の他の女性〔との共同生活〕はその限りではない。

（田野崎アンドレーア嵐）

8 平信徒の諸権限の縮小

さらに我々は、至福なる教皇ステファヌス〔1 世〕の定めに従って、俗人は、彼らがいかに信心深かろうとも、教会の財産について処分する権限を何ら持たず¹³、使徒教令¹⁴に従い司教があらゆる教会業務の管理をし、それらを神が御覧になっているかのごとく監督すべきことを規定する。したがってもし誰か諸侯もしくはその他の俗人の何者かが教会の財産あるいは占有物の処分や寄進を我がものにしたならば、その者は瀆神者と見なされるべきである¹⁵。

（上遠野翔）

9¹⁶ 近親婚の禁止

近親者同士の〔婚姻的〕結合がなされることを我々は禁じる。何故なら、神と世俗の諸法がこれらを禁じているからである。実際、神の諸法は、これを行なった者たちと、これら〔＝結合〕より生まれた者たちとを、追放するだけでなく、呪われた者たちと称してもいる。一方で世俗の諸法は、このような彼らを不名誉な者たちと呼び、相続から排除している。我々はそれゆえ、我々の父たちに従い、彼らに不名誉の烙印を押し、かつ

¹¹ 参照、トゥールーズ教会会議（1119 年）決議第 2 条（*Mansi* 21, 226）; D. 60 c. 2（*Fr* 1, 226）。

¹² 参照、第一ニケーア公会議（325 年）決議第 3 条。

¹³ 参照、ラテラノ教会会議（1110 年）決議第 1 条（*Mansi* 21, 8）; C.16 q.7（*Fr* 1, 807）。

¹⁴ 参照、使徒教令第 38 条（CSP 29）。

¹⁵ 参照、ラテラノ教会会議（1110 年）決議第 2 条（*Mansi* 21, 8）; C.16 q.7 c.25（*Fr* 1, 807）。

¹⁶ 参照、C.35 q.2-3 c.2（*Fr* 1, 1264）; トロワ教会会議（1093 年）決議第 1 条（*Mansi* 20, 789-790）。

不名誉な者たちとみなすのである。

（田野崎アンドレア嵐）

10 十字軍参加者の特権

エルサレムへ出発し、キリスト教徒たちを守るため、そして不信心な者たちの暴政を打倒するために効果的に支援を提供する者たちに対し、我々はその罪への赦免を与え、我々の主人たる教皇ウルバヌス〔2 世〕により規定されたごとく¹⁷、その家、家族および全財産を聖ペトロとローマ教会の庇護の下に置く。したがって、彼らの遠征中にそれらをあえて略奪したり横領したりした者は、誰であれ破門の罰をもって打たれるべきこととする。一方、エルサレムまたはヒスパニアへの遠征のために衣服に十字を着け、〔後に〕それらを外したことが知られている者たちに対し、我々は使徒の権威により以下のごとく命じる。すなわち、再び十字を身に着け、来たる復活祭からその次の復活祭までの間に旅を終えるべきこと。さもなくば、その時点から我々は彼らの教会への立ち入りを遮ると共に、彼らのあらゆる土地での、幼児洗礼と臨終の告解以外の聖務を禁止する。

（佐野大起）

11 「ポルティコ住民」の遺産問題について

さて、相続人なしで死ぬポルティコ¹⁸の住人の財産が死にゆく者の考えに反して決して収奪されないように、我々の兄弟たち〔＝枢機卿〕とクリア全体の助言から、また首都長官の意志と同意から、死亡したポルティコの民に関するこれまで当地に存在した件の不合理的な慣習が廃止されるべきであると我々は評決する。ただし、ポルティコの民がローマ教会と我々そして我々の後継者に対する従順と忠誠にとどまる場合に限る。

（柴田隆功）

12¹⁹ 教会の窃盗と教会の転用に対する処罰

聖なる父たちの教会法と調和することを考える我々は、聖ペトロ教会、救世主教会、聖マリア円形教会、バーリの聖ニコラウス教会、聖エギディウス教会²⁰のいとも神聖にして敬うべき祭壇から、または全教会の他の祭壇や十字架から、奉納物が俗人によって持ち去られることを徹底して禁止し、アナテマの厳しさの下に禁じる。教会が俗人によ

¹⁷ 参照、クレルモン教会会議（1095 年）におけるウルバヌス 2 世の演説（*Mansi* 20, 823）。

¹⁸ *Porticani*; *Du Cange* を参照のこと。おそらくサン・ピエトロ聖堂の柱廊広間があったローマのレオ街区 *Civitas Leonina* の住民。あるいはそこに住み着くローマ巡礼者のことか。

¹⁹ 参照、*C.10 q.1 c.14* (*Fr* 1, 616)。

²⁰ 全てローマの教会名。救世主教会はサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂。聖マリア円形教会（サンタ・マリア・ロトンダ教会）はパンテオンのこと。

って要塞化され、あるいは従属下に置かれることを、使徒の權威によって我々は禁じる。
(望月滯)

13 硬貨偽造者について

誰であれ偽の硬貨を知りながら造ったり故意に使用したりした者は、いわば呪われた者にして貧者の抑圧者かつ国家の擾乱者として信者の共同体から分離されるべきである。
(柴田隆功)

14²¹ 旅人を襲う者に対して

ある者が、使徒たちの墓所や他の聖人の祈禱所を訪れるローマ訪問者や巡礼者を捕えたり、彼らが持ち運ぶ財産を略奪したり、関税あるいは通行料の新たな取立てのことで商人を悩ませたりすることを試みたならば、賠償を果たすまで、キリスト教の交わりから遠ざけられるべきである
(望月滯)

15 神の平和

さらに、何であれ神の平和と休戦あるいは火災や公の舗道について、我々の先任のローマ司教たちによって定められたものを、我々は聖霊の權威によって確認する。
(望月滯)

16 修道士の権限について

さらに、聖なる父たちの足跡に従い、我々は一般的な教令によって以下のように定める。すなわち、修道士は、自身の司教にあらん限りの謙遜をもって服従し、指導者や神の教会の司牧者としての彼らに対して、然るべき恭順とあらゆることについての献身的な服従を示すべきである。彼らは、いかなる場所でも公的な莊嚴ミサを挙げるべきではない。また病人への公的な訪問、終油または悔悛〔の秘蹟〕からも、彼らの職務には属さないという理由により、完全に手を引くべきである。ただし、彼らが奉仕することが常態化している教会においては、司祭職にかぎってその司教の手から受け、引き受けた魂の配慮について司教に対して責任を負うべきである。
(櫻田宗紀)

[15] 違反者に対して

もしある者が休戦を打ち碎いたならば、司教によって三度までは賠償を勧告されるべ

²¹ 参照、C.24 q.3 c.23 (*Fr* 1, 996-997).

きである。しかしもし、三度勧告された者が賠償することを無視するならば、首都大司教の助言か近隣の司教の内の一人か二人を伴って、司教は逆らう者に対してアナテマの宣告を言い渡し、文書を通じて至る所の司教に告示すべきである。（望月滯）

[16]²² 修道士の聖務について

我々は、大修道院長と修道士に対して、公的な悔悛〔の秘蹟〕を与えること、病人を訪問すること、終油〔の秘蹟〕を行うこと、公的なミサを挙げることを禁じる。彼らは、聖香油や聖油、祭壇の聖別、聖職者の叙階を、その教区に彼らが滞在しているところの司教から授かるべきである。（纓田宗紀）

17 ローマの庇護

さらに我々は、聖なるローマ教会の所有物を神の恩寵を通じて安全な状態に保つことを切望し、いかなる武装した者も聖ペトロの都市ベネヴェントにあえて侵入したり、そこを占拠したりしないよう命じ、アナテマの罰の下に禁じる。もし何者かがあえて違えるなら、アナテマの鎖によって縛られる。（藤崎衛）

18 司祭は司教に服すべきこと

教区教会において司祭は、司教によって任命されるべきであり、魂の救済と司教に属する事物について彼らに対し責任を負うべきである。彼らは司教らの同意と意志なくして俗人から十分の一税や教会を受け取ってはならず、もしあえて違えるようなことがあれば教会罰に服することとなる²³。（築田航）

19 修道院の権利

修道院と附属教会が教皇グレゴリウス7世の時代からこの時代までに行ってきた奉仕を我々も許可する²⁴。教会と司教の財産を三十年後に大修道院長や修道士が取得することを我々は完全に禁じる²⁵。（柴田隆功）

20²⁶ 教会関係者や巡礼者の身体と財産の保全

父たちの教えの模範に促されて司牧の職という務めを遂行し、教会はその人材と資産

²² 参照、C.16 q.1 c.10 (*Fr* 1, 763).

²³ C.16 q.7 c.39 (*Fr* 1, 811).

²⁴ C.18 q.2 c.31 (*Fr* 1, 838).

²⁵ C.16 q.4 c.1 (*Fr* 1, 796).

²⁶ 参照、C.24 q.3 c.24 (*Fr* 1, 997).

からなる財産とともに、すなわち聖職者も修道士も彼らの助修士も、また巡礼者もさらに彼らの持ち物とともに安全な状態に妨害なく置かれると我々は規定する。しかし、もしある者がこれに反することをあえて行い、その悪事を認めた後に 30 日の期間内に適切に矯正しなかったならば、教会の敷居から遠ざけられアナテマの剣によって罰せられるべきである。

（柴田隆功）

21²⁷ 婚姻の禁止

司祭、助祭、副助祭、修道士たちに対し、内妻を持つこと、あるいは婚姻関係を結ぶことを我々は完全に禁じる。さらに、聖なる教会法の規定に従い、この種の者たちにより結ばれた婚姻もまた解消され、彼らは悔悛へと追い立てられなければならないと、我々は命じる。

（紺谷由紀）

22 教会財産の譲渡、不正な叙階、シモニアについて

特にオットー、ヒエレミアスとおそらくフィリップス²⁸によってラヴェンナ総督領内の所領からあらゆる場所に向けてなされた譲渡を我々は非難する。そのうえ全般的に、不法占有による全ての〔職位保有〕者、あるいは彼の教会の慣例に従って聖別されるべき司教や大修道院長の名前の下で教会法に則って選出された全ての者によって、いかなる方法であろうとなされた譲渡は、また彼らによって教会の聖職者の全体の合意なくしてか、またシモニアによってなされた人物の叙階も無効であると我々は裁決する。さらに、いかなる聖職者も彼の聖堂参事会員禄や何らかの教会聖職禄を何らかの方法で譲渡しようとすることを我々は万事を通じて禁じる。しかし、もしかつてそれがなされたか、いつかなされるならば、無効であり、教会法に則った刑罰に服すべきである²⁹。

（柴田隆功）

²⁷ 参照、本公会議決議第 7 条; D.27 c.8 (*Fr* 1, 100).

²⁸ 12 世紀初頭の反抗的なラヴェンナ大司教ら。

²⁹ 参照、C.12 q.2 c.37 (*Fr* 1, 699).

4. 第二ラテラノ公会議決議文翻訳

1³⁰ シモニアに対して：職務の喪失

我々は、シモニアによって叙階された者があれば、不法に取得した全ての職務を失うべきであると規定する。（増永菜生）

2 シモニアに対して：関与者の断罪

もし何者かが金銭によって聖堂参事会員禄、修道院長職、聖堂参事会長職、あるいは教会に関するその他の名誉や昇階、または教会のあらゆる秘蹟物、例えば聖香油あるいは聖油や、祭壇あるいは教会の聖別を、強欲の忌まわしい熱情が介在したために金銭によって獲得したならば、不当に獲得した名誉を失うべきである。また買主、売主、仲介者はいずれも、不名誉の烙印によって打倒されるべきである³¹。さらに、生計のためであろうが何らかの慣習を口実にしようが、これまでもこれからも、何者によってもいかなるものも要求されてはならず、またその者自身も与えようとしてはならず——何故ならば、これはシモニアだからである——、自由にかついかなる減少もなく、〔正当な方法で〕彼に授けられた位階や聖職禄をその者は享受すべきである³²。（紺谷由紀）

3 破門の影響

我々は、自分たちの司教によって破門された者たちが別の〔司教〕によって受け容れられることを、あらゆる仕方で禁じる³³。さらに、その者を破門した者によって〔破門を〕解かれる前に、それと知りながら破門された者と交わりを持とうとする者は、同様の判決に服する者とされるべきである。（上遠野翔）

4 聖職者は質素たるべきこと

我々はまた、以下のように命じる。すなわち、下位聖職者たちと同様司教たちは、精神の状態〔＝内面〕においても身体の様子〔＝外面〕においても、神と人々にとって好

³⁰ 参照、クレルモン教会会議（1130 年）決議第 1 条、*partim* (Mansi 21, 438)；ランス教会会議（1131 年）決議第 1 条、*partim* (Mansi 21, 458)；ピサ教会会議（1135 年）決議第 1 条、*partim* (Mansi 21, 489)。

³¹ 参照、クレルモン教会会議（1130 年）決議第 1 条、*partim* (Mansi 21, 438)；ランス教会会議（1131 年）決議第 1 条、*partim* (Mansi 21, 458)；ピサ教会会議（1135 年）決議第 1 条、*partim* (Mansi 21, 489)。

³² 参照、C.1 q.3 c.15 (*Fr* 1, 418)。

³³ 参照、メルフィ教会会議（1089 年）決議第 15 条 (Mansi 20, 724)；第一ラテラノ公会議（1123 年）決議第 2 条。

ましいものとなるよう努めるべきである。そして、衣服の華美さ、仕立て、あるいは彩色においても、また髪型においても、彼らは〔彼らを〕見ている者たちにとっての模範や手本となるべきであり、その者たちの視界に害をもたらしはならない。むしろ、彼らにふさわしい聖性を提示すべきである³⁴。もし司教によって警告された者が、矯正されることを望まないのなら、その者は教会の聖職禄を剥奪されるべきである³⁵。

（紺谷由紀）

5 聖職者の財産保護

ところで、聖なるカルケドン公会議にて定められたものが論駁の余地なく保持されるべきことを我々は命じる³⁶。即ち、死亡した司教の財産が何者によっても全く略奪されず、教会とその後継者の活動のために財産管理者と聖職者の自由な権能の内に持続すべきである。したがって今後はその忌まわしく激しい強欲は消え去るべきである。しかしもしある者が以後これに違反したならば、破門に服すべきである。これに対して瀕死の司祭あるいは聖職者の財産を略奪した者は同様の判決に服すべきである³⁷。（望月澤）

6³⁸ 同棲の禁止：聖職の剥奪

我々はまた、以下のことを決議する。すなわち、副助祭の位階かそれより上位にいながら、正妻を娶ったり、内妻を持ったりした者たちは、聖職や教会の聖職禄を剥奪されるべきである。というのも、彼らは名実ともに、神の神殿、主の器、聖霊の聖所であるべきなので、彼らが寝床と不潔さ（参照、ローマ 13:13）のために奉仕することは、品位に欠けるからである。

（田野崎アンドレーア嵐）

7 同棲の禁止：ミサの無効と正妻との離別の強制

さらに、我々の先任者であるローマ司教グレゴリウス 7 世、ウルバヌス [2 世]、パスカリス [2 世] らの足跡に従い、我々は以下のように命じる。すなわち何人も、正妻や内妻を持つことが分かっている〔聖職〕者が執り行うミサには出席してはならない³⁹。

³⁴ 参照、クレルモン教会会議（1130 年）決議第 2 条 (*Mansi* 21, 438)；ランス教会会議（1131 年）決議第 2 条 (*Mansi* 21, 458)。

³⁵ C.21 q.4 c.5 (*Fr* 1, 859)；参照、ランス教会会議（1148 年）決議第 2 条 (*Mansi* 21, 714)。

³⁶ 参照、カルケドン公会議（451 年）決議第 22 条。

³⁷ 参照、クレルモン教会会議（1130 年）決議第 3 条 (*Mansi* 21, 438)；ランス教会会議（1131 年）決議第 3 条 (*Mansi* 21, 458)；C.12 q.2 c.47 (*Fr* 1, 702)。

³⁸ 参照、クレルモン教会会議（1130 年）決議第 4 条 (*Mansi* 21, 438)；ランス教会会議（1131 年）決議第 4 条 (*Mansi* 21, 458)；D.28 c.2 (*Fr* 1, 101)。

³⁹ ランス教会会議（1131 年）決議第 5 条 (*Mansi* 21, 459)。

一方で、禁欲の法と神を喜ばせる純潔が、教会人と聖なる位階の保持者にも拡大されるために、我々は以下のように規定する。すなわち、司教、司祭、助祭、副助祭、律修参事会員、修道士、そして修道誓願を行った助修士のうち、聖なる規範を逸脱して正妻を自らに結びつける〔＝正妻を娶る〕ことをあえて行った者は、〔その女性と〕引き離されるべきである。というのも、この種の結合は、教会の規定に反して結ばれたことが明らかであり、我々はこれを婚姻関係とはみなさないからである。さらに、互いから引き離された者は、このような逸脱行為について、相応の悔悛を行うべきである⁴⁰。

（田野崎アンドレーア嵐）

8⁴¹ 同棲の禁止：修道女の場合

修道女についても、もし彼女らが、あろうことか婚姻しようと試みたなら、同様のことが遵守されるよう我々は決議する。

（田野崎アンドレーア嵐）

9⁴² 修道士の金を儲ける仕事に対して

さらに、我々が聞き及んだ通り、邪悪で忌むべき慣習が育った。というのも、修道士や律修参事会員が、衣を受け取り、誓願を立てた後に、聖なる教師のベネディクトゥスとアウグスティヌスの戒律を蔑み、世俗の利得のために世俗の法と医学を学んでいるのである。事実、食欲の炎により燃え立った彼らは、訴訟の弁護人となっている。また、輝かしい声の保護によって信頼された彼らは、聖歌と讃美歌に時間を費やすべきであるのに、様々な申立てによって、正義と不正、神の法と瀆聖を混同している。しかし、聖職者が法廷での討論の専門家となろうと欲しても、それは不適切でありむしろ恥辱であると皇帝の法は証言する。我々は使徒の権威により、この種の侵犯者は厳格に罰せられるべきであると決議する。また、その者たちは、魂の配慮を無視し、自らの会の目的に全く注意を払わず、忌むべき金銭と引き換えに健康を約束し、人間の肉体の治療者となる。また、淫らな目は淫らな心を告げ知らせるものであるから、修道的共同体は、誠実さが口にすることを恥じるような事柄に関わるべきではない。それゆえ、修道会および律修参事会が神に喜ばれ、聖なる目的に適って害されることなく保全されるよう、我々はこのことがこれ以上あえてなされることを使徒の権威によって禁じる。さらに、司教、大修道院長、小修道院長でこれほど大きな逸脱に同意したりそれを矯正しなかったりする者は、自らの名誉を剥奪され、教会の敷居から遠ざけられるべきである。（藤崎衛）

⁴⁰ C.27 q.1 c.40, *partim* (Fr 1, 1059); 参照、第一ラテラノ公会議（1123 年）決議第 21 条。

⁴¹ 参照、C.27 q.1 c.40, *partim* (Fr 1, 1059).

⁴² 参照、クレルモン教会会議（1130 年）決議第 5 条 (Mansi 21, 438-439); ランス教会会議（1131 年）決議第 6 条 (Mansi 21, 459).

10⁴³ 俗人による教会財の所有に対して

敬虔のための使用において認められると教会法の権威が示すところの教会の十分の一税が、俗人によって所有されることを我々は使徒の権威により禁止する。すなわち、司教か王か他の何者からであれそれを受け取り、教会へ返還しないのであれば、自身が瀆聖の罪を犯し永久なる断罪の危機に陥ることを知ることとなる⁴⁴。また我々は、教会を保持する俗人がそれを司教へ返還するか、さもなくば破門に服するようにと命じる⁴⁵。さらに我々は、助祭や司祭でない限り何者も大助祭や聖堂参事会長へと任命されるべきではないということを更新し命じる⁴⁶。そして上記の位階〔＝助祭や司祭〕より下にいる大助祭、聖堂参事会長および首席司祭たちは、服従せず、叙階されることを厭うのであれば、受け取った名誉を剥奪される⁴⁷。さらに我々は若輩や聖なる位階より下にある者たちではなく、賢慮や功德ある生活において高名な者たちへ先述の名誉が授けられるよう命じる⁴⁸。また我々は諸教会が請負の司祭へ委ねられることなく、権限の十分な個々の教会が固有の聖職者を有するよう命じる⁴⁹。

（築田航）

11⁵⁰ 人と動物の保護について

さらに、我々は以下のように命じる。司祭、聖職者、修道士、巡礼者や商人、往来し、農場にとどまる農民、またそれらを使って耕し、耕地に種をまくところの動物、そして羊は、保護されるべきである。

（纓田宗紀）

12⁵¹ 神の平和：期間について

また、休戦が水曜日の日没から月曜日の日出まで、主の待降節から公現祭の一週間後まで、および五旬節から復活祭の一週間後まで、万人によって過誤なく遵守されるよう我々は命じる。しかしもし誰かが休戦を破ることを試み、三度目の警告の後に償いをな

⁴³ 参照、Gerhoh von Reichersberg, *Liber de novitatibus huius temporis*, ed. E. Sacker, in *MGH Libelli III*, Hannover 1897, 291.

⁴⁴ 参照、ローマ教会会議（1131 年）決議第 6 条 (*Mansi* 20, 510) ; C.16 q.7 c.1 (*Fr* 1, 800).

⁴⁵ クレルモン教会会議（1130 年）決議第 6 条 (*Mansi* 21, 439) ; ランス教会会議（1131 年）決議第 7 条 (*Mansi* 21, 459).

⁴⁶ 参照、クレルモン教会会議（1130 年）決議第 7 条 (*Mansi* 21, 439) ; ピサ教会会議（1135 年）決議第 7 条 (*Mansi* 21, 489).

⁴⁷ 参照、ランス教会会議（1131 年）決議第 8 条 (*Mansi* 21, 459-460) ; D.60 c.3 (*Fr* 1, 226-227).

⁴⁸ 参照、ピサ教会会議（1135 年）決議第 9 条 (*Mansi* 21, 489-490)

⁴⁹ 参照、ランス教会会議（1131 年）決議第 9 条 (*Mansi* 21, 460) ; C.21 q.2 c.5 (*Fr* 1, 855)

⁵⁰ クレルモン教会会議（1130 年）決議第 8 条 (*Mansi* 21, 439) ; 参照、ランス教会会議（1131 年）決議第 10 条 (*Mansi* 21, 460).

⁵¹ クレルモン教会会議（1130 年）決議第 8 条、*partim* (*Mansi* 21, 439) ; 参照、ランス教会会議（1131 年）決議第 11 条 (*Mansi* 21, 460).

さなかったならば、彼の司教は彼に対し破門の判決を宣告し、かつ文書で近隣の司教たちに告知すべきこと⁵²。一方、司教たちは何人も破門された者を共同体に受け入れることはせず、むしろ文書で受け取られた判決を各々が確認すべきこと。しかしもし誰かがこれをあえて破ったならば、彼はその位階の危機に曝されることとなる。また「三重の紐は千切れ難い」（コヘレト 4:12）ゆえ、我々は以下のごとく命じる⁵³。すなわち、司教たちは唯一なる神と人民の安寧に対する敬意を持ち、あらゆる無精を退け、平和を固く保持するために相互的な助言と援助を各々に提供すべきであり、これをいかなるものへの愛情や嫌悪によっても怠らざるべきこと。もし誰かがこの神の事業において無精であることが明らかとなったならば、彼は自らの位階の喪失を被るべきこととする。

（佐野大起）

13 高利貸しについて

加えて、神と人間の法からは忌まわしく非毀すべきもの、旧約聖書と新約聖書により廃されたもの、すなわち金貸しの飽くなき欲望を我々は断罪し、あらゆる教会の慰めから切り離れた上で、以下のように命じる。すなわち、いかなる大司教も、いかなる司教も、各修道会のいかなる大修道院長も、あるいは修道会や聖職に属する何人も、最大限の注意なくして高利貸しを受け入れようとしてはならない。そして彼〔＝高利貸し〕は生涯に渡り不名誉を受け、改心しなかったのならばキリスト教の埋葬権を奪われるであろう。

（築田航）

14⁵⁴ 馬上槍試合の禁止

さらに、兵士たちが合意に基づいて集まることが常であり、彼らの力強さや無謀さの披露のために軽率にも交戦し〔＝馬上槍試合を行い〕、そしてそのために人の死や魂の危機がしばしば生じるような忌まわしい週市や年市が催されることを、我々は完全に禁止する。もし彼らのうちの何者かがそこで死なんとしたならば、悔悛や臨終の聖体拝領は彼がそれを望む場合に拒絶されることはないにしても、教会への埋葬の権利は剥奪されるべきである。

（紺谷由紀）

⁵² 原文は *scriptam annuntiet* だが、文法的に説明が困難であるためアパラトゥスの *dub. scripto* を採用した。

⁵³ 参照、D.90 c.11 (*Fr* 1, 315)。

⁵⁴ 参照、クレルモン教会会議（1130 年）決議第 9 条 (*Mansi* 21, 439)；ランス教会会議（1131 年）決議第 12 条 (*Mansi* 21, 460-461)。

15⁵⁵ 聖職者殺しに対して

同様に、以下のように決定された。すなわちもし何者かが、悪魔が唆したために以下のような讀聖の罪を犯したならば、つまり聖職者や修道士に対して暴力を行使したならば、アナテマの枷に服すべきである。また司教たちの内の何者も、〔暴力を行使した者が〕使徒〔＝教皇〕の面前に引き出され、その命令を受け入れるまでは、彼を解放しようとしてはならない⁵⁶。ただし彼が死の危機に瀕している場合はこの限りではない。また教会や墓地に逃げ込んだ者たちに対して、何者も決して厚かましくも手出しをしてはならないと我々は決定する。もしこのことをなしたならば、その者は破門されるべきである⁵⁷。（紺谷由紀）

16⁵⁸ 聖職禄の世襲に対して

以下のことに疑いの余地はない。すなわち教会の名誉は血縁ではなく功德によるものであり、神の教会は相続権に基づいてもしくは肉親であることによってある者を後継者として待ち望むのではなく、その統制とその職務の差配のために高潔で、聡明であり、敬虔なる人物を求めるのである。ゆえに、我々は使徒の権威により、何者かが教会、聖堂参事会員禄、首席司祭職、礼拝堂付司祭職、あるいは他の何らかの教会の職務を相続権に基づいて請求する権利を有したり、あえて要求したりすることを禁止する。それでももし悪劣で野心の咎のある者があえて試みたならば、しかるべき罰に処され、要求したものを失うべきである⁵⁹。（築田航）

17⁶⁰ 近親婚の禁止

当然ながら、近親者同士の〔婚姻的〕結合がなされることを、全くもって我々は禁じる。というのも、この種の近親相姦は、ほとんど慣習的になりつつあるが、聖なる父たちの規定と至聖なる神の教会は、これを嫌悪しているからである。世俗の諸法もまた、このような同棲から生まれた者たちを、不名誉な者たちと明言し、相続から排除してい

⁵⁵ 参照、クレルモン教会会議（1130 年）決議第 10 条 (*Mansi* 21, 439); トレント公会議（1545-1563 年）第 14 会期。

⁵⁶ 参照、ランス教会会議（1131 年）決議第 13 条 (*Mansi* 21, 461); ピサ教会会議（1135 年）決議第 12 条 (*Mansi* 21, 490); C.17 q.4 c.29 (*Fr* 1, 822)。

⁵⁷ 参照、ランス教会会議（1131 年）決議第 14 条 (*Mansi* 21, 461); ピサ教会会議（1135 年）決議第 14 条 (*Mansi* 21, 490)。

⁵⁸ 参照、クレルモン教会会議（1130 年）決議第 11 条 (*Mansi* 21, 439); ランス教会会議（1131 年）決議第 15 条 (*Mansi* 21, 461); トレント公会議（1545-1563 年）第 25 会期。

⁵⁹ 参照、C.8 q.1 c.7 (*Fr* 1, 591)。

⁶⁰ 参照、クレルモン教会会議（1130 年）決議第 12 条 (*Mansi* 21, 439-440); ランス教会会議（1131 年）決議第 16 条 (*Mansi* 21, 461); 第一ラテラノ公会議（1123 年）決議第 9 条。

る。

（田野崎アンドレア嵐）

18⁶¹ 放火に対して

さらに神および聖なる使徒ペトロとパウロの権威によって、我々は放火の最悪で掠奪的で恐るべき悪意を徹底して忌避し、禁じる⁶²。というのも、この災厄と敵意ある破壊は、他のあらゆる掠奪を凌駕するからである。それが神の民にどれほど有害で、魂と身体にどれほど損害をもたらすかを知らない者はいない。それゆえ、人々の安全のために多くの災難と多くの破壊が根拠にされ根絶やしにされるよう立ち上がり、あらゆる仕方で努力すべきである。それゆえ、もし何者かがこの我々の禁令の公布後に、憎悪または復讐ゆえの悪しき欲求に駆られて、火を付け、または付けさせ、もしくは火を付ける者に故意に助言または援助を与えるならば、〔その者は〕破門される。そしてもし放火犯が死亡したなら、キリスト教徒の埋葬権を剥奪される。また、〔その者が〕与えた損害について自らの能力に応じて賠償したうえで、爾後火を付けないと誓うまでは赦免されない。さらに、神への奉仕のために丸一年間エルサレムまたはヒスパニアにとどまるという罰がその者に与えられるべきである。

（藤崎衛）

19⁶³ 前条の補則

しかしもし、大司教または司教の何者かがこれ〔＝前条の規定〕を緩めるならば、〔その者は〕損害を賠償し、一年間司教職を放棄すべきである。

（藤崎衛）

20⁶⁴ 王および諸侯の裁判

確かに我々は、王および諸侯に対して、大司教と司教に相談した上で正義を行なう権能を拒否することはしない。

（望月霽）

21⁶⁵ 司祭の息子

司祭の息子は、修道院または聖堂参事会のなかで敬虔に暮らさない場合には、聖なる祭壇の務めから退けられるべきであると、我々は決議する。

（増永菜生）

⁶¹ クレルモン教会会議（1130 年）決議第 13 条、*partim* (Mansi 21, 440); ランス教会会議（1131 年）決議第 17 条、*partim* (Mansi 21, 461-462).

⁶² C.23 q.8 c.32, *partim* (Fr 1, 964-965).

⁶³ クレルモン教会会議（1130 年）決議第 13 条、*partim* (Mansi 21, 440); ランス教会会議（1131 年）決議第 17 条、*partim* (Mansi 21, 462); C.23 q.8 c.32, *partim* (Fr 1, 965).

⁶⁴ 参照、クレルモン教会会議（1130 年）決議第 13 条 (Mansi 21, 440); ランス教会会議（1131 年）決議第 17 条 (Mansi 21, 462); C.23 q.8 c.32 (Fr 1, 965).

⁶⁵ メルフィ教会会議（1089 年）決議第 14 条 (Mansi 20, 724); 参照、D.61 c.1 (Fr 1, 219).

22⁶⁶ 虚偽の改悛

確かに、聖なる教会を特に混乱させる事柄が他にあるなかで、その一つが偽りの悔悛であるため、我々は、我々の仲間および司祭たちに、俗人の魂が偽りの悔悛に欺かれ地獄へ連れて行かれるがままにしないよう警告する。つまり、多くのこと〔＝罪〕が無視されただ一つのことについて悔悛が行われる時、または別のこと〔＝罪〕から切り離されないままで一つのことについて行われる時には、悔悛が虚偽であるということは明白である。そのために〔次のように〕書かれる。「法の全体は遵守しているが一つの点において過ちを犯している者は、全てのことについて有罪となる」（参照、ヤコブ 2:10）。〔これは〕すなわち永遠の命に關してのことである。ちょうど全ての罪に囚われた者と同様に、ただ一つ〔の罪〕にとどまる者もまた、永遠の命の門のなかに入ることはないであろう。悔悛者が、罪なしにはいかなる方法でも遂行されえないような宮廷または取引上の職から退かない時、あるいは憎しみが心に抱かれている場合、あるいは誰であれ被害者に償いをなさない場合、あるいは被害者が加害者を許さない場合、あるいは何者かが正義に反して武器を取る場合にもまた、悔悛は虚偽とされる。（増永菜生）

23⁶⁷ 異端者に対して

また敬虔さの外観を装い、主の肉体と血の秘蹟、幼児洗礼、司教職と教会におけるその他の位階、適法な結婚の絆を糾弾する者たちを、我々は異端として神の教会から放逐して糾弾し、外部の権力によって罰されるよう命じる。同様に彼らの擁護者をも我々は同じ断罪の鎖に結び付ける。（上遠野翔）

24⁶⁸ シモニアに対して：秘蹟売買の禁止

その上、我々は、聖香油、聖油そして埋葬の権利を受け取ることに對して、売却の対価はいかなるものでも要求されるべきではないと付言し、命じる。（増永菜生）

25⁶⁹ シモニアに対して：俗人による叙任の禁止

もし俗人の手から主席司祭職、聖堂参事会聖職禄あるいはその他の教会聖職禄を受け取った者があれば、不適切に受け取った聖職禄を剥奪されるべきである。というのも、聖なる父たちの決定によれば、いかに敬虔であろうとも俗人は、教会の財産について処分するいかなる権限も持たないからである。（増永菜生）

⁶⁶ 参照、メルフィ教会会議（1089 年）決議第 16 条 (*Mansi* 20, 724) ; De pen. D.5 c.8 (*Fr* 1, 1242).

⁶⁷ トゥールーズ教会会議（1119 年）決議第 3 条 (*Mansi* 21, 226-227).

⁶⁸ 参照、トゥールーズ教会会議（1119 年）決議第 9 条 (*Mansi* 21, 227).

⁶⁹ 参照、第一ラテラノ公会議（1123 年）決議第 8 条。

26⁷⁰ 修道院的な女性共同体に対して

加えて我々は祝福されたベネディクトゥスの戒律にも、バシリウス [=バシレイオス] ないしアウグスティヌスのいずれの戒律にも従って生活しないにも拘らず、公に修道女と思われようとしているある女性たちの有害で忌まわしい慣習が廃止されることを決議する。というのも、修道院で戒律に沿って暮らす彼女たちは、教会においても食堂や寝室においても共用でなければならないのに、自身の隠れ家や私的な住居を建て、そこでもてなしのヴェールの下で無秩序に客やさほど敬虔でない者たちを聖なる教会法と善き習俗に反して迎え入れることを全く恥じないのである。したがって悪を行う者は皆光を憎み（参照、ヨハネ 3:20）、またこれにより彼女たち自身は、正しい人の天幕（参照、箴言 14:11）に隠れ、全てを見分ける裁き手の目を逃れられると考えるゆえに、我々はこのように恥ずべきで忌まわしい品行がこれ以上なされないようあらゆる方法で禁じ、アナテマの罰の下に禁止する。（上遠野翔）

27⁷¹ 修道女と修道士による共同の歌隊に対して

同様に我々は、聖歌を歌うために、修道女が聖堂参事会員あるいは修道士とともに、教会で一つの歌隊に集まることを禁じる。（望月滯）

28⁷² 司教選挙について

いかにも司教の死に際しては、父たちの定めが三ヶ月を超えて教会を空位にすることを禁じているため、我々はアナテマの下に、司教座の聖堂参事会員が司教の選挙から律修聖職者を排除することを禁じ、その者たちの助言により誠実で相応しい人物が司教に選ばれるべきである。しかし、もしこれら律修聖職者が排除されて選挙が執り行われたならば、彼らの同意と一致なくしてなされたことは無効かつ無益とみなされるべきである。（纓田宗紀）

29⁷³ 特定の武器の使用に対して

さらに我々は、死をもたらす、神に憎まれるべき弩手と射手のかの術が、キリスト教徒ならびにカトリック信徒に対して行使されることを今後はアナテマの下に禁止する。（佐野大起）

⁷⁰ C.18 q.2 c.25, *partim* (Fr 1, 836).

⁷¹ C.18 q.2 c.25, *partim* (Fr 1, 836).

⁷² D.63 c.35 (Fr 1, 247).

⁷³ X 5.15.1. (Fr 2, 805).

30⁷⁴ 対立教皇アナクレトゥス 2 世に対して

我々は、ピエトロ・ピエルレオーニと他のシスマ派や異端者によってなされたこれらの叙階については白紙とし、無効であることを決議する。（纓田宗紀）

⁷⁴ 参照、ピサ教会会議（1135 年）決議第 7 条（*MGH Constitutiones* 1, 579）；第一ラテラノ公会議（1123 年）決議第 5 条。